

研究成果展開事業
共創の場形成支援プログラム
(COI-NEXT)

育成型

終了報告書

「FUTURE ライフスタイル社会共創拠点」

プロジェクトリーダー	氏名	長谷川 泰久
	所属機関	東海国立大学機構名古屋大学
	部署	未来社会創造機構
	役職	教授

2022年4月

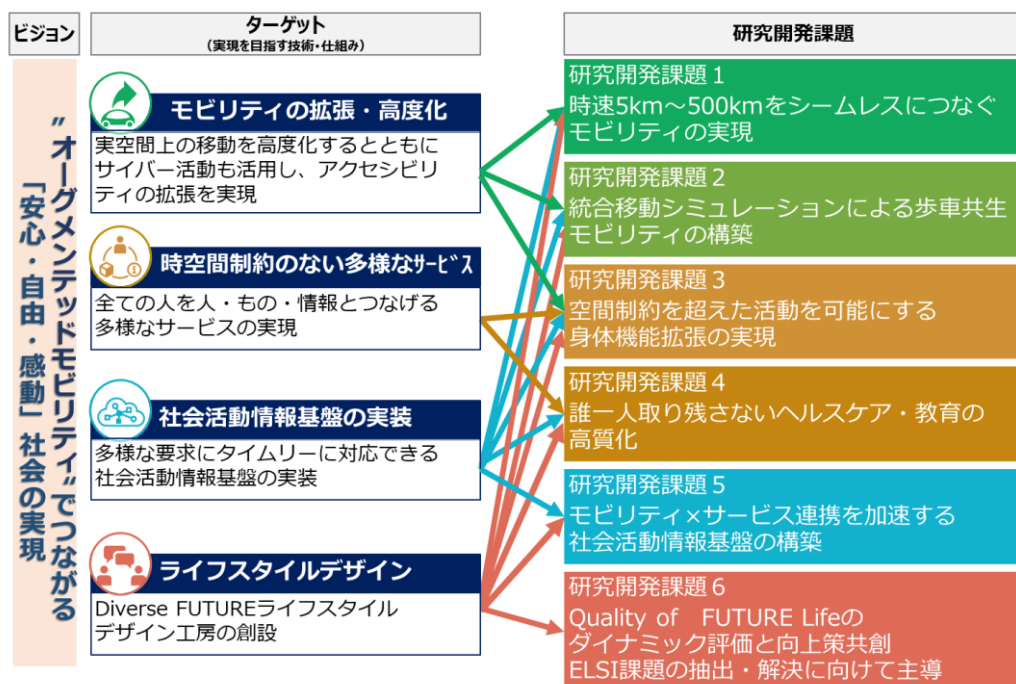
1. 拠点ビジョンの作り込み

FUTURE ライフスタイル社会共創拠点（以下、本拠点）は、「居住地に関わらず充実した仕事・サービスが得られ、豊かな生きがいを持てるレジリエントな社会プラットフォームの構築」をビジョンとし、いつでも、どこでも、だれもが人・社会とつながり、多様な生活様式を選択できるFUTURE ライフスタイルの実現を目指し活動を開始した。育成型では、「社会をどう変えたいか、社会がどう変わるべきか」を軸に、多様な人材を巻き込むワークショップ（WS）を2回開催し、拠点ビジョンの見直しを行った。1回目のWSではビジョンの種となるアイデアを創出（発散）し、2回目のWSでビジョンのアイデアをグループと全体のワークを行い、お互いのアイデアについて対話する形で進めた。WSを通じて、誰もが取り残されずにつながる「安心」、時間・空間・身体制約のない「自由」、それによって得られる「感動」の3つの価値を導出し、さらにそれらを実現する人・もの・情報・サービスへの十分なアクセシビリティを提供する“オーグメンテッドモビリティ”技術の開発が必要であるとした。最終的に、新しい拠点ビジョンを「“オーグメンテッドモビリティ”でつながる「安心・自由・感動」社会の実現」と設定した。



2. 拠点ビジョンからのバックキャストによるターゲット・研究開発課題の見直し

新たな拠点ビジョンからのバックキャストによりターゲットと研究開発課題について議論するワーキング(WG)を計8回開催した。WGでは、WSで設定したビジョンを基に、具体的なペルソナストーリー（誰のどのような課題を解決するか）を考えるために参加者との対話を通し深掘りし、意識の共有を図った。その結果、拠点ビジョンからバックキャストして、4つのターゲットと6つの研究開発課題を設定した。



3. 運営/研究体制とマネジメントの仕組み構築（持続可能性の具体化含む）

本拠点では、プロジェクトリーダー（PL）のもと拠点全体の運営方針を決定する会議体、さらに参画機関が一体となって拠点運営・企画に関わる会議体と研究開発に関わる会議体を設置し、拠点運営に関わる迅速な意思決定を行う体制で推進した。PL、副 PL 等の執行部をサポートするマネジメントチーム（特任准教授1名、特任助教1名、URA4名）を配置し、本拠点運営の実務面のサポートを行い、安定的な運営体制を構築した。研究体制については、アンダーワンルーフの環境下で産学官連携研究開発を進める他、研究開発の成果を実社会で実証するため、対象地域にて住民との対話・意見交換、実証実験を実施した。

4. 研究開発課題の成果

課題	育成型成果
社会活動OSの構築と実装	<ul style="list-style-type: none"> ○サービス発見機能やリアルタイムでn対nのメッセージングが可能な社会活動OS「Synerex」のドキュメントやチュートリアルビデオの作成 ○Synerexのセキュア認証基盤とモニタリング機構の設計・試作 ○新城市作手地区を対象としたデジタルTVを用いてハイブリッドキャストによるデータ連携の枠組み「デジタルつくで」を構築 ○学内にて社会活動OSのPoC「学内モバイル注文サービス」を実施
ポストコロナ移動プラットフォーム	<ul style="list-style-type: none"> ○アンケート調査による利用意向調査結果に基づいた利用意向モデルを構築 ○中量輸送システムに対する利用者の社会受容性を把握 ○新城市作手地区にデマンドバスのバスロケ・予約システムを試験導入
アクション支援システムの開発	<ul style="list-style-type: none"> ○アーム付き移動ロボットの遠隔操作インターフェイスの研究開発し、その成果を医療従事者に利用してもらう体験会を開催し、受容性などを把握 ○屋内移動用の歩行支援ロボットの研究開発し、その成果を医療従事者に利用してもらう体験会を開催し、受容性などを把握
Healthcare as a Service (HaaS)	<ul style="list-style-type: none"> ○つくでシャレットを通し、HaaSのあるべき姿を作手地区住民と共有 ○新城市の広報誌やケーブルテレビ番組による共創の場の取り組みの情報発信
プレジジョン生涯教育	<ul style="list-style-type: none"> ○バーチャル公民館のコンセプトを検討し、作手地区のステークホルダーが参加するシャレットワークショップ開催を通し、市民との対話できる関係性を構築 ○高校教育における新城市作手地区の古宮城のVRコンテンツサンプルを作成

5. 今後の活動について

育成型では、新城市作手地区をフィールドとし、本拠点の持つ技術を提供し住民の意見を得た。今後も社会が必要とするニーズを把握するため、ワークショップ等の継続的な実施と、参画企業や自治体との組織的な対話を通して、拠点の運営・研究開発の見直しに繋げていく。